



“なぜ”のない世界

Categorical Imperative

永田円了

三つの正義

三つの正義があるとしよう。1つは「世間が言うことが正しい」、2つめは「私が言うから正しい」、3つめは「正しいことが正しい」。この3つ目の正義を、哲学者エマヌエル・カントは『定言命法』と名付けた。この定言命法 (Categorical Imperative) が、今回のテーマである。私はこれを、“なぜ”のない世界」という言い方に置き換えて展開したい。

定言命法

正しいことはなぜ正しいのか、悪いことはなぜ悪いのか。理由は簡単、正しいから正しい、悪いことだから悪い、のである。哲学用語はちょっと難解である。「定言命法」をかみ砕いていうと、「絶対的な命令」、もっとかみ砕くと、「今までのカテゴリーとは全く違うところから降りてくる命令系統」と解釈される。

NHK「こころの時代」で、書家・金澤泰子さんが言っている。「50年書をやっていて、不思議な書の神様が降りてきてくれる瞬間を待っているのです」「翔子にはこの力が、たまに降りるんです」。翔子さんとは、金澤さんが24年前に授かったダウン症の娘さんのことである。

翔子の時間は絶対時間

金澤さんは、翔子さんに書を教える。平行線を理解させるのに、電車の線路を歩かせた。坂道をカニの横ばいで登ることで、右上がりの線の感覚を覚えさせた。翔子さんの書の腕はめきめき上達し、展覧会をひらけるまでになった。その書のすばらしさは、無欲であるが故の素直な線で表現されている。翔子さんの心にあるのは、将来有名になるうとか、過去を悔やむ、などという気配は一切ない。あるのは、“今、ここ”。

“なぜ”のない世界

吉田松陰のすばらしさは、“なぜ”のない世界に生きたからである。ペリーの黒船を目の前にして、みな指をくわえていた時、勇敢にも死罪を覚悟で舟を漕ぎ、黒船に向かう。松陰の密航を止めようとする龍馬に対し、「お前は異国を見たくないのか、海の向こうに何があるか知りとうはないのか」「ではなぜ行動せぬ。捕まると恐いからか、別れが辛いからか」「そんなのは全て言い訳じゃ！僕には言い訳なんぞ何にもない、どんな運命が待ちまわろうか後悔せん！」 “なぜ”のない、言い訳のない、問答無用の世界を吉田松陰は見事に生き抜いた。

ルリボシカミキリの青

「その青の鮮やかさに感動したとき、科学が始まった」。この感動が、福岡伸一が分子生物学者になったキッカケだった。人が感動したとき、なぜ感動したかを問う必要はない。感動したから感動したのである (= 第三のみち『定言命法』)。その感動がなかったなら、今の福岡伸一は存在しない。

生命体は本来女系だった

旧約聖書によると、イブ(女)はアダム(男)のあばら骨から作られたとある。しかし、分子生物学者・福岡ハカセは、真実を語る、引用しよう。「生命が誕生したとき、そこにはメスだけがいた。メスは誰の力も借りず、このやり方で自己複製した。母は自分そっくりな美しい娘を生み、娘はまた娘を生んだ。最初の10億年間、生命は女系だけで横糸を紡いでいた。しかしある時、女は思った。私の美しさ、別の女の美しさをより合わせたらもっと美しいものが生まれるだろうと。その時はじめて横糸(オス)が必要となった。(中略)アダムがイブを作ったのではなく、イブがアダムを作った。全ての男は、ママの美しさを別の娘のもとに運ぶ“使い走り”として作られたのである」。これも、今までとはまったく違ったカテゴリーからの新発見である。

< 事例 >

NHK ハーバード大学白熱教室「カントの定言命法」 Categorical Imperative
 米国医療保険法の可決、オバマ大統領はこれを、Victory for Common Sense と呼んだ
 NHK「こころの時代」より、書家・金澤泰子さんとその娘翔子さん
 NHK「龍馬伝」より、岩崎弥太郎の気づき
 NHK「龍馬伝」より、吉田松陰が黒船を目指す / 問答無用
 福岡伸一著「ルリボシカミキリの青」文藝春秋より、生命は本来女系だった
 キャサリン・ビグロー監督「Hurt Locker」 男たち、あんたらアホか！
 尾藤イサオ歌う / 悲しき願い / 誰のせいでもありゃしない、みんなオイラが悪いのさ

